

神経症的不登校の完治事例における 学級担任としての支援の在り方 —本人の回顧をもとにした事例の教訓化—

福 本 義 久

本稿は、母子分離不安から不登校状態になった小学5年男子児童Aの約1年半にわたる回復過程についてまとめたものである。筆者は、自身の子育てをありのまま本児の母親に見せることによって、本児と母親の「育ち直し」を支援した。また、級友の不慮の死という出来事に直面し、母子の関係性は確実に回復に向かい、1年半に及ぶAの不登校は完治するに至った事例である。さらに、そのX年後、A本人から当時の心の内を聞き取る機会に恵まれたことから、その回顧をもとに、当時、筆者が学級担任としてA及びその母親に対して行った支援の経緯をまとめた実践記録¹⁾をもとに、カウンセリングや心理学的な検証を試みた。そうすることによって、本事例から学級担任として神経症的不登校児に関わる際の支援の在り方を教訓化することができた。

このことにより、当時の筆者と同様にカウンセリングや心理学的な知見を持ち合わせていない、あるいは、教職経験の浅い若手教員が、学級担任として神経症的不登校児に関わる際の一つの視座になることを期待している。

キーワード：神経症的不登校、学級担任、不登校の経過、本人の回顧

I. はじめに

文部科学省の「平成24年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果によると、不登校について「『指導の結果登校する又はできるようになった児童生徒』に特に効果のあった学校の措置」²⁾では、「登校を促すため、電話をかけたたり迎えに行くなどした」ことが35.6%を占め、小学校においては他の対応に比べて突出している。不登校事例を抱える経験の浅い若手教員ならば、登校を促す対応をすれば効果があるのだとこの結果を読み取ってしまうかもしれない。しかし、宮本・弘中・徳丸（1992）が指摘するように、登校刺激を与えるかどうか非常に難しい不登校のタイプがあるため、登校刺激を与えることが常に功を奏するとは言えないのである。

小泉（1973）は、登校拒否（不登校）を次のように分類している。

- ①神経症の登校拒否 Aタイプ：優等生の息切れ型、親からの心理的独立の挫折、自己内の葛藤に起因するもの
- Bタイプ：甘やかされたタイプ、社会的情緒的に未成熟で困難や失敗を避けて安全な家庭内に逃避する

②精神障害による登校拒否：精神分裂病、うつ病、神経症などの発病の結果登校拒否を起こすもの

③怠学傾向 無気力傾向：学習意欲に乏しく時折休む、教師や親に言われて登校するが長続きしない

非行傾向：学校や家庭に適応できず非行グループに入り学校に来ない

④積極的・意図的登校拒否：学校に行く意味を認めず、自分の好きな方向を選んで学校を離脱する

⑤一過性の登校拒否：転校・病気その他客観的に明らかな原因があり、それが解消すると登校するようになるもの

この分類に従うと、Aは、神経症的登校拒否Aタイプに該当すると考えられる。

このように、その要因や背景によって不登校の様相が異なるのであるから、登校刺激ひとつをとってみても、実際に対応に当たる学級担任には、その局面において現状を適切に把握する「見取り」と、それに基づく具体的な支援を講じる「見立て」が求められる。岸田（2011）は、不登校支援としてどのような手立てを選択し決定するのかは、対応する教師の経験と勘に頼りがちであることを問題視している。だとしたら、心理学的な見地やカウンセリングの知識や技能を持ち合わせていない、あるいは、不登校事例を経験していない教員にとって「見取り」と「見立て」を選択・決定する拠り所が必要になってくるのではないだろうか。

一方、教員の大量採用時代であって、学校現場が直面する問題は、教員の多忙化と同僚性の危機であると言われている。つまり、これまで学校現場で培ってきた教育の有り様、例えば、子どもの理解、保護者との関係づくり、学級経営、指導技術、校務処理等をベテラン教員から若手教員へと伝達することが困難な現実がある。

仮に、不登校児を担当して悩んでいる若手教員に対して、ベテラン教員が自ら経験した不登校事例を伝える機会があったとする。多くの場合、ベテラン教員は、その事例の固有性を可能な限り排除した上で、教訓化したり一般化したりして伝えようとはせず、自らが経験したありのままを時系列で伝えてしまう。若手教員もまた、その事例の固有性を差し引いて受け止めようとはせず、自分が抱えている事例にも同様の対応をすれば解決できると皮相的な捉え方をし、てしまいがちである。

しかし、メンタリング³⁾で期待することは、ベテラン教員が、子どもの実態をどのように把握したのか、子どもと保護者の不安や願いにいかにして寄り添ったのか、どのような見取りや見立てをもって対応に当たったのか、さらに、不登校児と学級の子どもたちとをつなぐ学級経営をどのように進めたのか、という教員としての本質的な姿勢を教訓化したり一般化したりすることである。そうすることによって、ベテラン教員の経験事例は、若手教員が将来的に直面するであろう多種多様な事例にも柔軟に対応できる拠り所になり得るのである。

そこで、本稿では、Y年前に筆者が学級担任として関わった神経症的不登校児Aとその母親への支援、及び学級経営の在り方について、X年前のAの回顧を手がかりに検証を行い、本事例を教訓化・一般化しようと試みた。不登校の完治事例は数多く報告されている。しかし、不登校状態にあった本人が当時の心の内を振り返り、それをもとにして支援の在り方を検証する

事例は稀であろう。このことが、カウンセリングや教育相談の知見をもたない学級担任が不登校事例と関わる際の一つの視座になることを期待している。

Ⅱ. 事例の概要

事例の記述については、個人情報保持の立場から事例の本質を損なわない限りにおいて事実関係を変更し、人名はアルファベットで表した。また、登場人物には記述内容について了解を得てある。

1. 事例

男子児童A、小学5年（10歳）

(1) 主訴

不登校（小学4年の4月当初から不登校傾向が始まり、同年7月からはほぼ全欠で、この年度の授業日数220日のうち、欠席日数は167日であった（表1））。

表2 Aの年間欠席状況（小学4年時）

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	計
授業日数	17	22	23	16	21	24	23	18	18	21	17	220
欠席日数	3	4	11	15	21	24	23	15	17	17	17	167

(2) 生育歴

母親は、乳幼児期より発達の遅れを大変心配してはいたものの、本児は「手のかからない子」だったと言う。母子分離不安が強く、幼稚園時代から不登園傾向にあり、半分程度の登園日数であった。また、小学校入学後、いじめにあったことを理由に、3学期途中、本校に転入してきた。その後、小学3年までは、友達関係も良好で、年間10日前後の欠席日数であった。

(3) 家族構成

Aの家庭は、宅配業に従事する父親（48歳）と専業主婦の母親（40歳）との3人家族である。Aに不登校傾向が現れた頃、父親は脱サラをして宅配業に転職した。母親は、終日Aに占有された状態にあり、掃除や洗濯、食事などの家事はおろそかになってしまいがちであった。

(4) 問題の経過

Aは、小学4年当初から、頭痛や腹痛、友達の男子児童Bとのトラブルでいやなことがあったなどを理由にした欠席が目立ち始めた。6月になって水泳指導が始まると、「プールが怖い」や「おなかが痛い」などの理由で欠席が連続するようになり、担任のC教諭が家庭訪問しても隠れてしまうようになった。

C教諭は、毎日のようにA宅への家庭訪問を繰り返したが、登校する準備をしても朝になると、母親に物を投げつけたり、パニックを起こしたりして一日中家に閉じこもるようになった。

7月、C教諭の相談を受けた校長が、Aの母親と面談を行い、無理に学校に行かせようとせず、

長い目でAの変化を待つようにすることになった。しかし、その直後からAは、全欠状態になった。

9月には、校長の勧めでAの母親がスクールカウンセラー⁴⁾に相談したが、Aが母親から離れないため、面談はこの一度きりとなり継続できなかった。

小学5年になって、筆者がAの担任になり、学級の児童は、組替えのため3分の2が入れ替わった。前学年でAと同じ学級であった子どもたちは、Aが不登校状態であることを知ってはいたものの、前学年では、毎日のようにAへの連絡帳やメッセージを書き続け、届けていたため、子どもたちには徒労感や無力感が漂っていたのが印象的であった。

2. 学級担任としての支援方針

筆者がAを担当するに当たり、C教諭から提供されたA及び母親に関する情報については参考程度にとどめ、自らがAや母親との関係づくりを通して見取ったことをもとに支援の仕方を考えることにした。それは、Aが不登校であるからというわけではなく、筆者にとっては、前任者からの情報に頼って子どもに対する先入観をもつことなく、「自分の五感で確かめる」ことを常に学級経営の大前提にしてきたからである。ただし、子どもに対しても保護者に対しても、C教諭をはじめ前任者の取組を批判的にとらえているという誤解を招かないよう細心の注意を払うことにした。これは、いわゆる「悪者探し」にならないようにという学級経営上の筆者の信念でもあった。

また、筆者が本事例にかかわったY年前には、昨今では当然になっているスクールカウンセラー等による支援を受けることは珍しく、地域社会はもちろん、学校現場でさえ不登校に対する理解も乏しかった。そのため、「不登校は本人の怠けであり、それを許す保護者の責任である。」というような偏見があった。そんな厳しい現実の中で、Aは、学級や学校から孤立し、その母親もまた地域社会から孤立してしまい、その結果、さらに周囲に理解されないという環境におかれていた。家庭内でも、相談する身内がいない上に、非協力的で責任を母親に押しつけるだけの父親との齟齬もあった。

小学5年の始業式当日の夕刻、筆者が家庭訪問した際、Aは、NHK教育テレビの幼児向け番組『おかあさんといっしょ』を見ながら手遊びに熱中していた。その姿は、当時、保育園に通っていた筆者の娘と同じような発達段階にあることを物語っていたため、「Aは今、育ち直しを求めているのだ。」と直感した。さらに、これは長期的にかかわる必要があると考え、次のような対応をすることにした。

(1) A及び母親

家庭訪問は、週1回（不定期）放課後に行うこととし、その際、「Aに対して学校の話はこちらからしない。」「Aのことについて詮索しない。」「学校へ行こうなどと誘わない。」という3つの原則を自らに課すこととした。これは、登校刺激を与えないためであるが、それ以上に、筆者が目当たりしたAの退行現象を最優先した判断であった。とはいえ、当時の筆者がカウンセリング等の知識をわずかでも持ち合わせていたわけではない。

そして、母親との直接的な関係づくりを急ぐよりも、筆者がAに接する様子を母親に見せることによって、母親にはAを「育て直したい」と思ってもらえるように仕向けることにした。それは、Aの幼児性と暴力性との大きなギャップに対して、どのように接すればよいのかがわからず、腫れ物に触るようなおどおどした態度の母親をしっかりと支援する必要があると考えたからであった。

(2) 学級の子どもたち

学級の子どもたちが、Aへの連絡帳やメッセージを毎日届ける対応は休止させ、Aへの対応は筆者が担うようにした。これは、前学年からAに対して「早く学校に来てほしい。」という願いをもって毎日の連絡帳やメッセージを届けていたが、Aの不登校が長期化することによって、子どもたちには、その期待感が徒労感や無力感にすり替わってしまっていると感じたからであった。

しかし、学級の子どもたちとAとの関係性を維持するため、教室の壁面に「Aのギャラリー」を設けることにした。これは、Aが一日の大半を費やしている「道路地図の模写」を掲示することによって、学級にAの居場所を確保し、子どもたちとのつながりをつくろうと考えたからであった。また、「子どもに責任を負わせるようなことをしない」という筆者の学級経営についての基本姿勢でもあった。

Ⅲ. 事例の経過とその検証

本稿では、佐藤（1995, 2005）による登校拒否の経過に従って特徴的な傾向を示した上で、A自身の回顧を踏まえた検証を行う。このことにより、本事例がもつ不登校事例の典型的な流れを抽出することによって一般化することができると考えた。

なお、不登校の回復過程について、牟田（2003）と小澤（2006）は、それぞれ、前兆～前駆期・進行期・混乱期・回復期と前兆期・初期・中期・後期の4期に分類しているが、これは、佐藤（1995, 2005）の8期をそれぞれ4期に統合したものである。また、一丸・菅野（2007）は、不登校前駆症状期・不登校初発期・連続的不登校への移行期・閉じこもり期・家庭内適応期・回復初期・社会適応開始期の7期を示している。

本稿で佐藤（1995, 2005）の不登校の経過をもとにしたのは、不登校児および家族の心理的な変容の様子が、第Ⅰ期から第Ⅷ期まで端的に称されている上に、不登校児が一進一退、紆余曲折を繰り返しながら回復に向かうことが他のモデルに比べて、心理学的知識を持ち合わせていなくても理解しやすいからである（図1）。

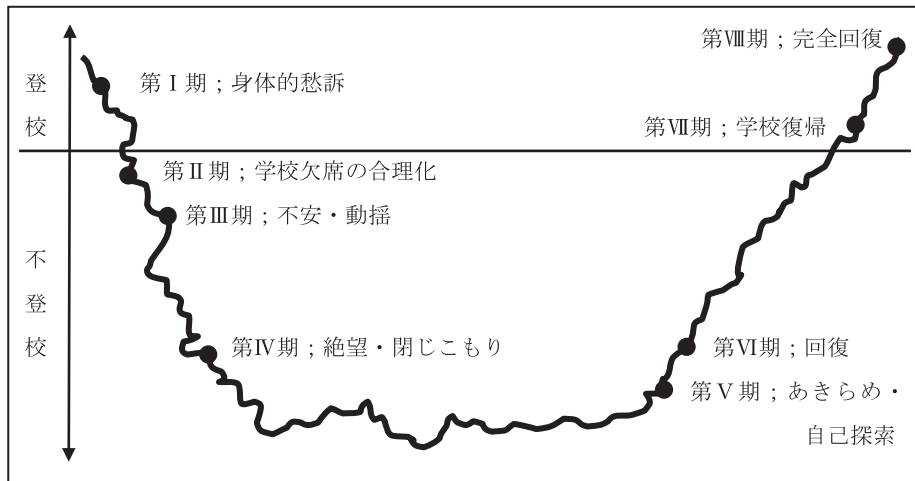


図 1 不登校の経過

さらに、Aの回顧に基づいて筆者の支援を検証することによって、神経症的不登校事例と関わる際の学級担任の支援の在り方としての「見取り」や「見立て」を教訓化できると考える。なお、第Ⅰ期；身体的愁訴の段階、第Ⅱ期；学校欠席の合理化の段階については、筆者が直接関わっていないためこの限りではないが、各段階において学級担任が適切な「見取り」と「見立て」ができるような知見を整理しておく。

1. 第Ⅰ期；身体的愁訴の段階

(1) 特徴

この段階は、子どもが頭痛や腹痛など体の不調を訴えて欠席するが、親も子どももこれを不登校の前兆だとは考えていない時期である。

(2) Aの様子

Aが小学4年になって頭痛や腹痛、Bとのトラブルを理由とした欠席が目立ち始めた1学期当初に当たる。

(3) 不登校の前兆

佐藤（2005）は、多くの臨床事例をもとに、不登校の前兆を大きく4点に整理した上で、いくつ該当すれば不登校に発展するというのではなく、教師としては、これらの前兆が見られないかについて保護者に向けて注意喚起を行うことが不登校の予防や即時対応に効果的であると指摘している。

① 身体的不調

- ㊦ 特に、朝の登校時を中心に心身の不調（疲労、頭痛、腹痛、発熱、嘔吐、下痢、気分不良など）を訴える。これらの不調は、午後や夕方になると消えたり、軽くなる傾向がある。小児科などで異常はないとか、ちょっとした疲れとか言われることが多い。

- ① 学校から帰宅すると、「疲れた」とぐったりし、横になってしばらく休むことがある。
- ② 登校準備の行動の変調
 - ㊦ 朝、なかなか起きてこない。制服の着替えに手間取る。洗面、朝食、排泄などに時間がかかる。
 - ㊧ せっかく登校の準備ができて、玄関先で鞆を持ったままため息をついたり、登校に向けて玄関を一步前に踏み出すことにためらいを見せる。それまでのいきいきした登校の姿が消える。
 - ㊨ 家族に車で学校まで送ってもらってやっと登校する。
 - ㊩ 理由不明の欠席、遅刻、早退が時々起こる。中でも休み明けや軽い病欠の後に起こりやすい。また、特定の教科がある日に欠席する。
- ③ 家庭生活の変調
 - ㊦ 家庭では、以前に比べてガラガラした生活を送ることが多くなる。
 - ㊧ 以前のように宿題や勉強をしないで、テレビの視聴、テレビゲーム、漫画などに熱中する。
 - ㊨ どこかイライラしていて、家族やペットに当たり散らす。一方、親、特に母親に甘える。
 - ㊩ 家族を避け、自室で過ごすことが多くなる。家族とは口をきかなくなる。親が学校の話に触れると、話をそらしたり、怒ったりする。
 - ㊪ 自宅で一人で好きなことをして夜更かしが多くなる。
- ④ 学校生活についての不満
 - ㊦ 教師や友人についての不平不満が多くなる。
 - ㊧ 学校がおもしろくない、友人がいないなど、学校への不満をよく口にする。
 - ㊨ 夏休み中の行事に参加しなくなる。
 - ㊩ 学校なんかつまらない、学校へ行く意義がないなど、学校への拒否感情を口にする。
 - ㊪ 友人とのつきあいが悪くなる。
 - ㊫ 学習に興味を失い、勉強しなくなる。

2. 第Ⅱ期；学校欠席の合理化の段階

(1) 特徴

この段階になると、親は、子どもの体の不調は心理的なものからきていると思い、はじめて不登校を疑うようになる。医師もこの見方に同調する。また、子どもは学校について不満を述べ、学校に行けない責任は学校や友達などにあると言うようになる時期である。

(2) Aの様子

Aが、「注射がいやだ」「プールが怖い」などの理由で欠席するようになり、担任のC教諭が家庭訪問しても隠れてしまうようになった小学4年の6月頃に当たる。C教諭は、毎日のように家庭訪問を繰り返したが、登校する準備をしても朝になると、母親に物を投げつけたり、トイレに隠れたりして一日中家に閉じこもるようになった。

7月には、校長とAの母親とがAのことで相談をし、無理に学校に行かそうとせず、長い目でAの変化を待つようにすることになったが、その直後、Aは全欠状態になった。

(3) 検証

この段階では、C教諭の働きかけにより、7月には、校長が、9月にはスクールカウンセラーが、それぞれAの母親とAの不登校傾向について面談しているのであるが、Aが母親から離れようとしないうちに継続的にカウンセリングを受けることができなかった。

このように、佐藤（2005）は、不登校児の多くは、母親が相談機関を訪問することに対して消極的か反対であるため、「心配している気持ちを話し、親として自分がこれからどうしたらよいか、自分のことで相談に行くのだ。専門の先生と話し合って、あなたが知らないうちに何かをすることは絶対にない。」などと子どもに話し、同意を求めることで、ほとんどの子どもが不承不承ながら納得するので、できるだけ早期に相談機関と連携することの重要性を示唆している。つまり、母親が定期的に相談に出かけ、落ち着いて一段と明るい表情で帰宅してくると、子どもの相談機関への不信と不安は次第に和らぎ、「お母さんはカウンセリングから帰ると2、3日は優しい。ぼくの気持ちがわかるお母さんになっている。」などと、カウンセリングを受けて帰る母親の態度が次第に子どもの期待している方向に変わっていく実感を積み重ねることが何より効果的であるということを意味している。

(4) 不登校の誘因

高木（1965）は、およそ50年も前、「登校恐怖症」と呼んでいた頃から、不登校の子どもが言う誘因の浮動性を指摘した上で、これは、子どもが嘘をついたり、または、場当たり的な説明をしたりしているのではなく、子ども自身が学校全体に不適応または違和感をもっていて、尋ねる人や尋ねられる場所によって子どものあげる事由が変わるからであると説明している。したがって、親や教師が、不登校の原因探しを行ったとしても、それが不登校の解決に結びつかないことが多く、逆に、原因探しは、親と子どもと教師との三者の関係を悪化させてしまいかねないことも指摘している。

3. 第Ⅲ期；不安・動揺の段階

(1) 特徴

この段階は、子どもの言うことは言い逃れだと親は子どもを責め、登校を求める。それについて子どもは情緒的に落ち着きをなくすようになり、家庭内暴力も起き始める時期である。

(2) Aの様子と具体的な支援

4月末の家庭訪問の際、母親が「このごろAの機嫌が悪いんです。」と言うと、Aがすかさず、「俺の中には悪魔がうようよおんね（いるんだ）。」と答えた。「悪魔がうようよおる（いる）って、それは、どういうことか教えて。」と筆者が尋ねると、Aは母親を指さして、「こいつが学校へ行けて言うからや（だ）。」と答えた。「今はお母ちゃんと一緒にいたいから学校には行けないんでしょ？ A。」と筆者がAに問いかけると、Aは「うん。」と素直に答えた。さらに、「お母ちゃんが好き。」ということも照れくさそうに付け加えた。筆者は、そのことの意味を、「お母さん、Aちゃんが腹立つようなことを言ったりしたりすると思いますが、それは悪魔がAちゃんに言

わせたりさせたりしていることで、Aちゃん本人が言っているとは思わないでやってくださいね。Aちゃん自身は、お母さんのことが好きで好きで、今はそばを離れることができないのだと思いますから。」と母親に説明することで、Aが言いたいであろうことを代弁した。その上で、登校刺激を避け、Aを甘えさせてあげてほしいと話した。

(3) Aの回顧

この頃の自分について、Aは、「自分ではお母さんにひどいことを言ったりしたりしていることはよく分かっていたのですが、本当に自分の中に悪魔がいて自分が乗っ取られているのか思えなかったのです。特に、お母さんが学校のことを言い出すと、その悪魔が次から次へと出てきて自分をコントロールできなくなってしまうん（の）です。箒や包丁を振り回して暴れているうちに体はへとへとになっていても悪魔がおとなしくなるまでは止まらなかったんです。」と振り返った。

(4) 検証

不登校状態にある場合、Aのように退行して幼児性を見せる反面で暴力的な言動に及ぶこともある。そのため、保護者にとっては、不登校状態にあることだけでも受け入れ難い上に、本人の真の姿がわからなくなってしまうことから、途方に暮れてしまうようである。

佐藤（2005）は、この時期の家庭内暴力について、母親、そして家族からの分離・独立への営みと見ることができると見取っている。つまり、自分を誰よりもかわいがって育ててくれ、最も深い関係にある母親に、「自分をこんなにした張本人はお前ではないか」と食ってかかり、母親を否定することによって、その固着的関係から抜け出そうともがき苦しんでいるのである。

Aは、この状況を「悪魔に乗っ取られている」と表現したが、これは、幼児性や暴力性など、不登校児が表出する感情や行為そのものは本人の真の姿によるものではなく、本人にはあたかも「別の人格」がコントロールしていると感じられるものであることを意味するのであろう。しかも、現在の本人、幼児退行した本人、悪魔に乗っ取られた本人など複数の「人格」とも捉えられる状態が入れ替わり表出してくるということを、本人と関わる者が理解して対応してほしかったという訴えではなかっただろうか。

この時期の家庭内暴力については、母親や家族との固着的関係から離脱するための苦悶が表出されているということを理解して臨まないと、「不登校は本人の怠惰である」などと曲解し、本人が抱える問題の本質を見逃してしまうことになるであろう。実際に、当時は、そのような捉え方をする同僚も少なからず存在した。

また、このように荒れ狂って母親に暴力を振るおうとする子どもに断固とした態度で立ち向かう父親の姿は見られないと以前から指摘されてきた。本事例においても、筆者は、Aの父親が見て見ぬふりをしたり、母親の責任を追及したりする場面に何度か居合わせた。ここに、高木（1965）や佐藤（1967）が言う不登校の過程で父親の無力さや父性の欠如が現れている。

(5) 登校刺激

昨今では、登校刺激を加えない方がよいという対応の仕方は、おおむね共通理解を得てきた一方、冒頭でも指摘したように、『指導の結果登校する又はできるようになった児童生徒』に特に効果のあった学校の措置』として「登校を促すため、電話をかけたり迎えに行くなどした」

ことが顕著であることも事実である。

佐藤（2005）は、登校刺激を与えてもよい時期として、第Ⅵ期（回復の段階）以降と限定し、第Ⅲ期（不安・動揺の段階）から第Ⅴ期（あきらめ・自己探索の段階）までは登校刺激を避けるべきではないとしていることから、登校刺激を加えることが常に功を奏するといえないのである。また、登校刺激を加えないという対応の仕方については、言語レベルではなく、情緒レベルで、あるいは、行動レベルで保護者の理解を得るのは、想像以上に難しいことを指摘している。つまり、頭でわかっている、行動に移すことはきわめて難しいからこそ、登校刺激を巡る対応の仕方が、親や教師の変容を測る尺度になり得ると言える。

4. 第Ⅳ期；絶望・閉じこもりの段階

(1) 特徴

この段階では、いろいろ試みても事態は解決せず悪化するため、親も子も絶望感を覚える。子どもは落ち着かず、生活も乱れ、閉じこもるようになり、昼夜逆転現象も見られるようになる時期である。

(2) Aの様子と具体的な支援

5月初旬の朝、学校に突然母親から電話が入り、相談したいことがあるから、今日は必ず家庭訪問してほしいということであった。放課後に訪れると、母親が待っていましたとばかりに、「このごろAがおかしいん（の）です。包丁や箸を持って暴れるし、そうかと思えば私と一緒に風呂に入ったり、夜は私にしがみついて寝るんです。それに、テレビを見ながらおしっこを漏らしたりおしゃぶりを欲しいと言うん（の）です。挙げ句の果てに、『ぼくはどうやって生まれてきたん（の）？』『ホシマ（本当）にお母さんの子どもか？』『へその緒見せろ！』って言うん（の）です。」と矢継ぎ早に話した。

筆者は、「Aは今、お母さんとのしっかりとした関係をつくろうとしていろいろ揺さぶっているのだと思うので、お母さんは、何を言われてもどしりと大きく構えて聞いてやるようにしてほしい。」と話した。ちょうど、筆者の子どもの発達段階と重なっているように感じたため、我が子のことを例に出しながら子育て談義のようにフランクに話すよう心がけた。

(3) Aの回顧

「ぼくが暴れるたびにお母さんが先生に電話していることは知っていました。正直なところ、先生に来てもらうために暴れていたこともありました。それは、先生がお母さんにぼくのことをいろいろと説明してくれるのを聞いていると、悪魔が一匹ずつ消えていくような気がしたからです。でも、先生がお母さんにぼくの代わりに気持ちを話してくれたときはしばらくの間は良いのですが、すぐに忘れてしまって『学校に行け』とか『お母さんは死にたい』とか言い出すので同じ事の繰り返しでした。今でも覚えているのは、先生がお母さんに今からもう一度ぼくを育て直すと思えばいいという話をしてくれたことです。先生の家で育ててもらえたら良いのにと考えたこともありました。」とAは、筆者の対応について述懐した。

(4) 検証

Aの母親と子育て談義のような会話を通してAの育て直しに視点を向けていったことは結果

的には良かったのかもしれない。しかし、A自身が母親よりも筆者の方に家庭的な愛情を求めようとしていたことは、支援者としての立場を逸脱していたのかもしれない。つまり、Aにとって真に求めなければならない母親との密接な関係づくりを間接的に疎外していた可能性があるのかもしれない。筆者がAの気持ちを代弁するのではなく、そんなAの気持ちに母親が自ら気づけるような働きかけをすべきであった。

つまり、筆者が自らの子育てに例えてAの気持ちを代弁したことは、結果的に母親を「悪者」の立場に置いてしまっていた可能性があるということが、Aの回顧から教訓として読み取ることができる。

また、この頃、Aが母親に自分の出生に関わる問いかけをしばしばしていたことは、不安定なAの様子にオロオロしていただけの母親に、「覚悟を決めてはくと向き合って！」と迫っていたということも見取らねばならなかった。つまり、Aの母親は自分をおいて他にはなく、例え悪魔のように暴力を振るわれたとしても、それも含めて受け止めて育て直そうとする覚悟を求めていることを母親に気づかせる問いかけであったと考えられる。

(5) 子宮回帰

この時期の閉じこもりの意義について、佐藤（2005）は、「子宮回帰」という表現で母親に対して次のように説明するという。「子どもさんは学校などで、いろいろの原因で不安やいらだちを覚え、もっとも安心して生活できる“家庭という子宮”に一時返りをしているのです。“家庭という子宮”に立ち帰り、学校などでなくしてしまったエネルギーの回復にがんばっています。お母さんは、妊娠中に子どもが生まれてくる日を楽しみに待ち続けておられました。母親として注射や物理的圧力などで子宮に働きかけて、一日も早く子どもを体外に出そうとはされなかったでしょう。心身共に母体の健康に気をつけて、生まれてくる日を待たはずです。妊娠期間は、ほぼ決まっていますが、“家庭という子宮”内の生活の期間は、子どもによって違い、はっきりと予言できませんが、待っていると必ず子どもさんは“家庭という子宮”から出てきます。家族みんなが落ち着いて子どものありのままを受け入れて、“家庭という子宮”内の生活を見守っていきましょう。」

これは、「子どもは、不登校であれ、何であれ、家庭で生きているだけでよいというほどに、ありのままの存在を受容され、家庭と共に安らぎの時間を与えなければならない」という佐々木（1996）の指摘と合致する。

5. あきらめ・自己探索の段階

(1) 特徴

絶望の時期を通過し、親が長い人生だと覚悟を決めると、家庭内の緊張感が次第にとれてくる。好きなことに熱中しながら、過去の自分を振り返り始める時期である。

(2) Aの様子と具体的な支援

夏休み直前の半日授業日の午後、予告もなくAが2日続けて学校に姿を見せた。一度目は保健室まで入るのがやっとという感じであったが、二度目は教室まで入った。Aが教室に来た証を残すように勧めると、黒板に「2学期から学校に来る。A」と書いた。ようやく、Aの中で

何かが動き始めているのだと感じた瞬間であった。終業式後、Aに通知票を届けると、「先生、『登校拒否』って書いて。」と出欠日数の欄を指さしたが、「別にええわ（かまわない）。」と冗談を言う余裕を見せた。4月以降、筆者が訪問した際には恒例にしていたサッカーをしたいとすぐさまサッカーボールを持って外に飛び出していった。夏休み中は、父親と共に宅配の手伝いをするのだとボールを蹴りながらうれしそうに話した。助手席に座って地図を見ながらお父さんのナビゲーションをするのが楽しみだと、地図の模写を特技としているAらしい役割を見つけたようで、ずいぶんたくましく思えた。また、Aが自ら父親との関係について触れたのは、これが初めてであった。

(3) Aの回顧

「通知表に『登校拒否』と書いてほしい。」と筆者に要求した理由を尋ねたところ、Aは、次のように説明した。「お母さんもお父さんも先生もだれもぼくのことを『登校拒否』って言わなかったでしょ。でも、1年以上も学校へ行っていないのだから、はっきり『登校拒否』って言ってもらう方が気が楽だったんです。頭が痛くて体がだるくて医者に見てもらって『風邪ですね』って言ってもらうと何か落ち着くでしょ。あんな感じでした。『早く、だれかぼくを登校拒否と認めて！』って思っていました。」

また、小学5年になってから学級の友達から連絡帳やメッセージがなくなったことについては、「みんなには悪かったけど、毎日毎日来てくれるな！って思っていましたから、それがなくなってホッとしました。でも、先生が、家に来てくれた日は、必ず地図を持って帰ってもらおうとがんばって描いていました。みんなの感想を聞かせてもらうのが楽しみでした。」と振り返った。

(4) 検証

Aの言うように、筆者は決して「登校拒否」や「不登校」という言葉を使わなかった。いや、使えなかったという方が正しいと思う。もし、その言葉を使うことによって徐々に回復の兆しを見せていたAが傷つくのではないかと、状況が悪化するのではないかとかという思いがあったからだ。つまり、そうすることによって、Aや母親に対して配慮しているというポーズをとり、そこに自らの逃げ場所を用意していたのかもしれないと気づいた。しかし、それはAに対して正面から向き合うことではなかったのかもしれない。

不登校児は、心のエネルギーが極度に低下しているがゆえに立ち止まり、母親との密接な関係性を取り戻すことによってエネルギーを充填する。ということは観念的に理解できても、本人からすれば、「ただの欠席とはちがう！病気ではないのだ！それが『登校拒否』でしょう！」と主張していたのであろう。

それは、母親との関係性が回復に向かい始めるとき、学級担任のような第三者に対しても「覚悟を決める」ことを求める言動が認められるということではないだろうか。同様に、教室の黒板に「2学期から学校に来る。」と宣言したことによって、学級の友達にも「みんな、ぼくが来ても大丈夫？覚悟してね。」ということ投げかけていたと考えられる。

つまり、この時期には、それまで閉ざしてきたように見える他者との関係性を回復しようとするので、学級担任としては、いつでも学級と本人とを結ぶことのできる環境を整えておく必

要がある。佐藤（2005）によると、級友の訪問を受け入れるようになるのは、第Ⅵ期（回復の段階）以降で、少なくとも第Ⅲ期や第Ⅳ期では難しいので、学年当初に筆者が立てた支援方針は適切であったと考えられる。

（5）耽溺行動

この時期、多くの子どもに興味の局限とそれへの耽溺行動が見られることが知られている。つまり、子どもは、自宅で自分の好きなことだけをして過ごしていて、それに熱中している様はまさに局限であり、熱中している状況は耽溺であり、この状態が半年以上に及ぶことも珍しくないという。それゆえ、家族は「おかしくなったのではないか」「一生、こんな事が続くのではないか」などと不安になることも少なくないと佐藤（2005）は言う。

さらに、山中（1993）が、このような活動を「窓（channel）」と呼び、「これを守ってやるのが治療の根幹である」というように、それを抑制するとかなくすとかいう方向ではなく、むしろ、その行動を膨らませて、その関心や興味を広げたり、それを通して生活空間を家庭外に拡大したり家族間や教師との交流を深めるという方向に変えることが効果的である。

本事例の場合は、道路地図の模写というAの耽溺行動を「窓」として学級の子どもたちとの交流に生かすことができたことが、Aの自己探索に有益であったと考えられる。

6. 第Ⅵ期：回復の段階

（1）特徴

この段階になると、一段と落ち着きを見せ始める。荒れていた生活に活気とけじめが出てきて、隠していた制服や教科書等が少しずつ部屋の中に姿を現すようになる時期。

（2）Aの様子と具体的な支援

夏休み中、同じ学級の男子児童Dが、父親と共に川で亡くなるという衝撃的な出来事があった。緊急の学級登校日には、Aは出席しなかった。しかし、告別式当日、Aは母親の喪服の裾を強く握りしめ、友達には目もくれずまっすぐに筆者のそばに寄ってくるなり、“天国からの地図”を自ら広げて筆者に手渡した。「ここがDの家やねん（なんだ）。半径1 km以内の地図を縮尺5千分の1で描いてあるから、絶対に迷わへん（迷わない）と思う。ついでに、ここがおれの家。」と、一晩で描き上げたという“天国からの地図”は実に詳細に描かれていて、A以外の友達の家もきちんと描き込まれていたのも、友達はもちろん、参列者がその地図に集まり、出来栄を褒め称えその場が騒然となると同時に、父子の非業の最期を悼む人々の涙を誘った。筆者は、A自身に“天国からの地図”を棺に納めさせるべきかどうか悩んでいたが、Aの母親の眼差しから「先生、お願いします。」という意図を感じ、筆者の手で納めることにした。小学3年の時から同じ学級だったDの死は、Aにとって言葉では表すことのできない自分の存在理由を確かめる機会であったのではないかと感じた。

2学期初日から2日間、真っ黒に日焼けしたAが登校した。クラスではDの机に花が供えられている以外はそれまでと何も変わらないように感じられるぐらい、Aを自然に受け入れていた。ところが、Bとのトラブルが原因で再び欠席するようになった。母親から学校に電話があり、明日から学校へ行かせるので時間割を教えてほしいとのことであった。いつになく、母親に元

気と自信とが感じられる口調であった。連絡を届けると、母親が「今、あまりえらそうに口答えするん（もの）で、たたいて怒りました。」と頼もしい表情で話した。そして、「先生に言うことあるやろ（でしょ）。」とAを促すと、「明日から学校に行きます。」とAは許しを請うような表情でつぶやいた。母親が母親になった瞬間を見た気がして、Dのことで憔悴しきっていた筆者を、今度は母親が励ましてくれているようにさえ思えた。

(3) Aの回顧

筆者は、Aが“天国からの地図”を書いたわけをずっと知りたかったことを打ち明けたところ、次のように教えてくれた。「おじいちゃんが亡くなったとき、お盆になったらおじいちゃんがあの世から還ってくるって聞いたので、Dもちょうどお盆に亡くなったし、まだ子どもなので、還ってくるのも大変だろうと思ったんです。ちょうど、夏休みにお父さんの仕事を手伝って毎日ナビゲーションしていましたから、思いついたんだと思います。」

また、Dの死について当時どのように受け止めていたのかについても尋ねたところ、「よくわかりませんが、ぼくは、生きているんだから、Dの分までがんばらないといけないうって思っただんです。」と言葉少なに語ってくれた。

(4) 検証

Dの“死”は、あまりにも突然の予期せぬ出来事であり、学級担任である筆者としては、痛恨の極みであった。筆者は、当時、この出来事が、快方に向かいつつあるAを後押しし、回復を早めてくれたのだとドラマチックな捉え方をしていた。しかし、Dの“死”は、本事例固有の特異な出来事であるため、これを排除して教訓化したり一般化したりしなければならないと考えるに至った。そこで、この時期のAの様子や母親との関係に焦点化して検証してみると、A自身が不登校の間に成長と発達を実現し、自分づくりを大きく進めていたということを見出すことができる。それは、佐藤（2014）が指摘するように、不登校によって起きた赤ちゃん返り状態への退行から抜け出して、年齢にふさわしい生活行動ができるようになり、さらに、不登校前よりも強い自分をもつことになっていくということにほかならない。つまり、A自身はもとより母親にとっても、先が見えない不登校という苦労を互いに乗り越えてきた自信が、子どもと母親とで共有されていたがゆえの強さである。また、その段階にあったからこそ、学級の友達をはじめ不特定多数の参列者が集まる場に、母親と共にではあっても、自らの意思で訪れることができたのであり、母親にしても、“天国からの地図”を筆者に委ねる判断と振る舞いを迷うことなく行うことができたのであろう。正に、1年余りに及ぶ不登校を克服しつつある親子の成長と発達を象徴する場面であったと言える。それは、2学期当初のAの口答えを叱責する母親の姿としても現れている。

不登校になる子どもは、人一倍感受性が豊かであるがゆえに立ち止まり、人生の階段を二段飛ばしするというような登り方ができないのだと言われる。早期教育がもてはやされる昨今、子どもはまるで促成栽培でもするかのように早く大人になることを余儀なくされている。そんな社会では、人一倍感受性の豊かな子どもは立ち止まらざるを得ない厳しい状況にあると言える。当時と比べても、不登校児童生徒数が増加傾向にあることも納得できるように思うが、Aのような感受性豊かな子どもにとって“死”ということがどれだけ身近であるのかということ

を考えざるをえない。逆に言えば、観念的な人間にとっては、“死”という人間の尊厳に対する感覚がとても乏しくなってしまうのではないかとさえ思える。さらに、いくら特技にしているとはいえ、たった一晩であれだけ詳細な地図をフリーハンドで仕上げるだけのモチベーションと緻密さや集中力には、今更ながら感服してしまう。せめて、写真にでも残してあればと悔やまれるところであるが、それだけの潜在能力や可能性を筆者はどれだけ引き出したり伸ばしたりする手伝いができたのだろうかと考え込んでしまう。そうすることが学級担任の本分であるはずだった。

(5) 回復期の目安

佐藤（2014）は、子どもが不登校の状態から徐々に脱して、社会活動再開に動き始めるこの時期の状態を“啓蟄活動”と表現し、次のような活動が見られることを紹介している。ちなみに、この時期のAは、⑨と⑩以外すべての“啓蟄活動”を行っていた。

- ① 感情の起伏が小さくなる。
- ② 生活の乱れが減少してくる。たとえば、起床就床や食事の時間が一定する。
- ③ 夜着から昼間着に着替える。
- ④ 一つの遊びに熱中してはいるが、その時間が短くなる。ほかのことにも関心を向けてくる。
- ⑤ ときどき、退屈だ、何もすることがないなどつぶやく。
- ⑥ 家族が学校に触れても、あまり感情は悪くならない。ときには家族の話に乗ってくる。
- ⑦ 見向きもしなかった学校からの連絡や配布物を自分から読む。また、その内容について家族に話しかけることもある。
- ⑧ 「外へ出てみては…」という家族の誘いに、過敏に拒否的な態度をとらなくなる。聞き入れるようなそぶりが多くなる。
- ⑨ カウンセラーからの家庭訪問の申し出にも、頭から拒否しなくなる。
- ⑩ 自分が会わなければよいならカウンセラーの訪問に反対しない。
- ⑪ 見えないところにおいていた学生服、教科書、ノート、鞆など通学に必要なものが自室の目につくところに置かれている。
- ⑫ 自発的に自室を整理整頓したり、掃除する。
- ⑬ 親に散髪させる。
- ⑭ 子どもから学校を話題にし、「今頃、学校では…がおこなわれている」など、たんと話す。

7. 学校復帰の段階

(1) 特徴

この段階になると、学期初めや学校行事などをきっかけに学校に復帰するようになる。登校したり休んだりの散発的な登校から次第に出席日数が増えていく時期。

(2) Aの様子と具体的な支援

登校してはトラブルを起こしていたBとの関係がスムーズにいくことを母親は願っていた。

そこで、筆者は、B宅を訪ね、Bとその母親とに事情を話し、一緒に登校できるよう朝の待ち合わせ場所と時刻を決めてAに知らせた。それでも、毎日のようにAとBとのトラブルは続いた。2人が互いの愚痴を交互に私に告げに来る。互いの言い分をじっくり聞いてやると、また仲直りをしてあっけらかんとして遊んでいた。以前は、欠席する理由になっていたBとの関係が、今ではAの登校する動機に好転しているように感じた。

(3) Aの回顧

「Bとは、今でも時々連絡を取っています。小学1年の途中で転校してきてすぐに友達になったのがBだったし、家も近かったので仲良くしたかったのですが、ぼくが素直にその気持ちを表せなかったん（の）です。でも、こういう性格はなかなか変わりません。中学校でも、友達とよくトラブルになりました。理解してもらえないというよりも、自分から閉じてしまうという感じでした。」

(4) 検証

Aと学級との関係は、担任である筆者を媒介にすることによって、子どもたちがAと直接関わることを控えさせた。その代わり、Aが描いた道路地図を教室に掲示するギャラリーを設けることで、子どもたちのAに対するつながりは保たれていると考えていた。

このような対応をすることについては、当時の筆者には確たる根拠はなく、それまでに経験した不登校事例から得た学級担任としての感覚であった。つまり、不登校児は社会性を身に付けるのに時間がかかったり、交友関係が狭かったりするため、特定の友達に固執する傾向が強いと感じていたからである。Aが回顧するように、この傾向は、不登校が完治してもなお本人の社会性の回復に大きな影を落としていることがわかる。

学級担任としては、常に学級の友達との関係を保つことを優先するあまり、不登校状態にある子どもの立場に立った対応を疎かにしてはならないのである。1日や2日の病気欠席の子どもにとっては、連絡帳やメッセージを届けてもらえば、早く元気になろうという励みになる。しかし、心のエネルギーが低下した不登校状態にある子どもにとっては、逆に働いてしまう可能性があることをわきまえて対応することが求められる。つまり、この見立てができるかどうか学級担任にとって重要な資質であると言える。

(5) 再登校後の対応

不登校から回復して再登校できても、そのまま学校生活に適応し、再び不登校にならないという保障はないことは、神保（1984）の調査結果（表3）からも明らかである。出席状況では、時々休むことが過半数を超えていること、また、半数近い子どもが特定の生徒をたよりその生徒とだけいるということ、さらに、消極的な学習態度である子どもも半数を超えていることを考えても、再登校後にもカウンセラーや学級担任の支援を継続することが必要となる。

また、佐藤（2005）は、「再登校してきた子どもは、学校に関する心理的葛藤を完全に整理して喜び勇んで登校してくると思っはならない。長い苦しみの末、ある程度、自分を整理して登校してきていても、その根っこには、不登校感情が生きていることに担任は思いをいたらせ、この感情に配慮しながら、子どもを温かく受け止めることが大事である。」と学級担任の配慮と支援の必要性を指摘している。

さらに、その際、再登校する子どもが不安に思うであろうことを6点示し、このことに対する学級担任のきめ細かな対応を求めている。

- ① クラスメートがどんな顔をして自分を迎えるのか？
- ② 長く休んでいた理由をきかれるのではないのか？きかれたら、何と答えようか？
- ③ クラスメートにどんな言葉を交わせば良いか？
- ④ 勉強についていけるのか？授業で指名されたらどうしよう？
- ⑤ みんなが自分をどう思っているのか？
- ⑥ みんなの前で失敗しないか？

表 3 再登校後の生徒の様子

出欠状況	
時々休む	53.4%
ほとんど休まない	21.5%
休まないが、遅刻をする	3.1%
休まないが、早退する	2.1%
休まないが、特定の科目を欠課する	2.6%
全く休まない	4.7%
無回答	12.6%
友人関係	
友人と交わらないで孤立している	23.6%
特定の生徒をたよりその生徒とだけいる	48.2%
学級にとけこんでいる	15.2%
学級のリーダーになっている	0%
無回答	13.1%
学習態度	
消極的	51.3%
ふつう	32.5%
積極的	3.7%
無回答	12.6%

8. 完全な回復の段階

(1) 特徴

この段階になると、完全に不登校の状態から脱して健全な生活をするようになる。親も子ども学校へ行けなくなるかもしれないという不安から解放される時期。

(2) Aの様子と具体的な支援

学級の友達も学級担任も変わらず小学6年に進級した。Aは、時々欠席はするものの、修学旅行や運動会などの行事にも参加できた。2学期後半になると、欠席するインターバルが長くなり、欠席するとしても母親から必ず電話連絡が入った。「Aはちょっとがんばり過ぎて疲れたと思います。また、明日から行かれますから。」と余裕の出てきた母親の言葉に安堵した。しかし、Aは、2週間に1日だけは必ず休んだ。それも、前日に「先生、明日は休みます。明後日の連絡を教えてください。」と言って。そんな中で実施した休日参観当日、化粧し、パーマをかけ、着飾った姿で恥ずかしそうにAの母親が教室に姿を見せた。顔見知りの保護者から声をかけられると、照れくさそうに挨拶を返していた。Aもまた、そんな母親を気にしながら、休日にもかかわらず半日ががんばることができた。

(3) Aの回顧

「この頃、一番心配していたことは、いつまた不登校状態になるかわからないということでした。もう『悪魔』は出てこなくなっていたから大丈夫だと思う自分の方が強くなったと感じていました。だからこそ、2週間に1日は休んでいたのだと思います。お母さんも休むことを止めなかったし、逆に、がんばり過ぎていないかどうかを心配してくれていたのがとてもうれしかったです。実は、ぼくが休んだ日は、たいてい、お父さんの宅配についていっていたんで

す。ほくも、(運転)免許を取ってお父さんと一緒に仕事をしようと思っています。」

(4) 検証

不登校状態にあったことが嘘のように登校していても、本人にとっては、再び不登校児状態に戻りはしないかという不安が常につきまとっていることがわかった。Aの回顧を待たずとも、学級担任ならば、当然のこととして察することができないといけない。

また、Aの回復過程においては、父親の存在があまり見えなかったのであるが、小学5年の夏休み以降、父親の仕事に着いていく機会が増えていた。それまでは母親から離れることができなかったAにとって、母親との関係性の回復に続いて、父親とも同様の作業を始めていたことがわかる。当時、筆者は、夏休み中に起こったDの死が、Aの回復に大きく味方したのではないかと捉えていた。しかし、Aと両親にとっては、その出来事が家族の有り様を考えるきっかけにはなったものの、Aと母親、Aと父親、母親と父親、それぞれの関係性を着実に回復する営みが進んでいたことに着目すべきであった。「悪者探し」はしないという基本姿勢を標榜しながらも、「お父さんがもっとAや母親を支えてくれればいいのに。」というような意識が筆者の中にあっただための見落としだったのかもしれない。

(5) 予後

小泉(1979)は、不登校発現後5～10年の期間における登校の経過を追跡調査した結果、次の5つに類型化し、その事例の出現割合も示している。

- ①単発型：発症後、登校を再開し、調査時点まで不登校が起きていないもの(30%)
- ②再発型：不登校を2度繰り返したもの(17%)
- ③繰り返し型：登校と不登校を繰り返したもの(40%)
- ④繰り返し・除籍型：繰り返しているうちに除籍となったもの(10%)
- ⑤継続・除籍型：登校しないまま除籍となったもの(3%)

佐藤(2014)は、この調査は30年以上も前のものであっても、その本質は今も変わらないと指摘した上で、当時も今も、学校復帰できたからといって、その後も順調に登校し、卒業していくとは限らないと、予後の継続的な支援の必要性を強調している。それは、学級担任としては、登校できたかどうかで一喜一憂するのではなく、子どもなりに共に歩もうとする姿勢が大事であるということである。もし、再び子どもが不登校状態になれば、静かにそして優しく従来続けてきた家庭訪問による支援を継続すればよい。つまり、子どもがどのような状態になっても、学級担任が慌てず、あきらめないうで支援を続ける姿勢が子どもや保護者にとっては、精神的安定と成長・発達の原動力となり、他の子どもにとっても、自分がどのような時にも学級担任は寄り添って共に歩んでくれる存在であるという信頼感を与えうるのである。

Ⅳ. 終わりに

学級に不登校状態の子どもが在籍していなくても、比較的欠席日数の多い子どもや遅刻を繰り返す子ども、他者との関わりを避けようとする子どもなど、心のエネルギーが低い子どもは少なからずいる。また、ネグレクトや児童虐待の危機にさらされている子どもも後を絶たない。

このような子どもの成長に関わる問題が常態化している学校現場にあって、学級担任は厳し

い局面での対応を迫られることが珍しくない。だからこそ、ベテラン教員が経験してきた数多くの事例から導き出した経験知を教訓化したり一般化したりすることが求められている。

教科指導においては、様々な立場からこのような取り組みが進められているが、生徒指導に関して、特に、保護者対応や不登校、いじめ問題など、今日的な教育課題については、事例の固有性が強いいため、このような作業を行うのは難しいのが現状ではないだろうか。

今回、本事例を8つの回復過程を横糸に、神経症的不登校状態にあった本人の回顧を縦糸にして再構成することによって、事例の固有性はあるものの、学級担任として不登校児及び保護者や学級とどのような姿勢で関わるのかについて教訓化することを試みた。心理学的な見地からの更なる検証や理論化も必要ではあるが、本事例を通じて、筆者が若手教員に伝達すべきことは抽出できたと考える。

また、学級担任にとって、生徒指導上の問題で保護者対応に悩まされることの多い昨今、「傾聴」や「共感」が保護者との信頼関係を結ぶ基本的スキルであると言われている。筆者は、27年に及ぶ教職経験から、このことを「親身になる」ことだと捉えている。それは、正に親の立場に成り代わって対応するということである。例えば、問題を正しく理解すること（見取り）、問題解決のための具体策を示し共に取り組むこと（見立て）、必要な情報を提供すること等が挙げられる。

つまり、若手教員に対して、子どもや保護者には、「親身になって」対応することがキーワードであり、それは、「傾聴」することと「共感」することが基本的な姿勢であることを、具体的な対応の仕方を提示して説明することがメンタリングの在り方であると考え。それは、自らが経験した個別の事例を単なる武勇伝的に若手教員に自慢するのではなく、事例のもつ固有性や特異性を極力排除して教訓化・一般化して伝達することに他ならない。

「この事例では、この手立てが功を奏するだろう。」「こんな対応をしていると破綻するだろう。」ということをベテラン教員はある程度予見することができる。その「見取り」や「見立て」を教訓化・一般化する作業を他の事例についても進めていきたい。

V. 付記

本事例の回顧協力並びに公開をご快諾くださいましたAとご家族並びに関係者の皆様に感謝いたします。

VI. 註

- 1) 福本義久 (2008) 不登校事例における教員の職能成長、第24回東書教育賞入選論文、pp.22-29
- 2) 平成25年12月10日、文部科学省初等中等教育局児童生徒課より公表。調査結果5「小・中学校の不登校」の(6)「『指導の結果登校する又はできるようになった児童生徒』に特に効果があった学校の措置」
- 3) 知識や経験の豊かな人々（メンター）が未熟な人々（プロテジェ）のキャリア形成と心理・社会的側面に対して一定期間継続して支援を行うこと。
久村恵子 (1999) 「経営組織におけるキャリア及び心理・社会的支援行動に関する研究－メンタリン

グ行動の影響要因に関する研究を通じて」, p.44

4) 当時, 本市では, 8 小学校 4 中学校に対して, スクールカウンセラー 1 名が, 週 1 日だけ配置されていた。

VII. 文献

宮本茂雄・弘中正美・徳丸千佐子（1992）登校拒否の態様別指導方法の在り方に関する研究, 千葉大学教育相談研究センター年報 9, pp.1-46

小泉英二（1973）『登校拒否』学事出版

岸田幸弘（2011）教師が行った不登校支援策の選択・決定の理由 - 小学校教師へのインタビューから - 昭和女子大学紀要『学苑』848号, pp.42-60

佐藤修策（1995）『登校拒否はなおる』山陽新聞社

佐藤修策（2005）『不登校（登校拒否）の教育・心理的理解と支援』北大路書房

牟田武生（2003）『ひきこもり・不登校の処方箋』オクムラ書店

小澤美代子（2006）『続・上手な登校刺激の与え方』ほんの森出版

一丸藤太郎・菅野信夫（2007）『学校教育相談』ミネルヴァ書房

高木隆郎（1965）学校恐怖症の典型像（1），児童精神医学とその近接領域 6（3），pp.146-156

佐藤修策（1967）『登校拒否児』国土社

佐々木正美（1996）不登校児への初期の対応，小児内科28（5），pp.662-665

山中康裕（1993）登校拒否と日本文化，精神科治療学 8（11），pp.1305-1311

佐藤修策（2014）『不登校の子どもの生活と親・教師の支援』あいり出版

神保信一（1984）『登校拒否児の理解と指導』日本文化科学社

小泉英二（1979）情緒障害児の予後に関する研究（その1）『現代のエスプリ139』至文堂